

智惠子抄

作曲 観世持夫

地

静夫 四郎

苗あしらひ

智恵子^上 程狂^上た智恵子は口をきかない。ただ尾長や千鳥と相圖する

防風林の丘つづぎ。いちめんの松の花粉は黄いろく流れ。

五月晴の風に九十九里の濱はけむる。智恵子の浴衣が

松にかくれ 又あらはれ 白い砂には 松露

がある。わたしは松露をひろひながら。ゆるくり智恵子

のあとをおかす。尾長や千鳥が智恵子の友だちも。人間で

あること。やめた智恵子に。恐ろしくきれいな。朝の天

空は。絶好の遊歩場。智恵子とふ。舞初鏡ヲシニツ目ノ名ヨリ三ツ目

人の子ひとり。居ない九十九里の砂浜の砂は。すわめて智

恵子は遊ぶ。無数の友だちが智恵子の名をよぶ。踵あとをつけて。

いちいちいちいち。ナル砂に小さな。口の中で。いつでも何

鳥が智恵子に。寄つて来る。よびかへす。ちいぢ

か。言ひてる智恵子が両手をあげて。智恵子はそれを。ぼらば

らちちち。群れ立つ千鳥が智恵子をよぶ。ちいぢ。ちいぢ

ちいぢ。潮は人間商賣さらりとやめて。も。天然の

向うへ。行つてしまつた智恵子の。うしろ姿が。ぼつんと

見える。三丁も離れた防風林の夕日の中で。小大ナシ

下町の松の花粉をあひながら。程はいつまでも立ち盡す。習ノチ一多也

光太郎。智恵子はたぐひなき。夢をきづきてむかし此所に

住みにき。光太郎智恵子はたぐひなき夢をきづきてむかし

此所に住みにき

安福春雄 穂書店

三須銘吾 藤田大五郎